

豊庄だより



第 704号 2022 年 4 月 12日

朝日新聞のコラム「天声人語」（2022 年 4 月 5 日）に映画「カチンの森」について書かれていました。紹介します。

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

▼後ろ手にしばられた遺体が穴に無造作に放り込まれていく。ポーランド映画界の巨匠アンジェイ・ワイダ監督の「カチンの森」にそんな場面がある。第2次大戦中にソ連が起こした大量殺戮（さつりく）を告発した。▼殺害されたのは2万人を超すポーランド人。ワイダ監督の父親も犠牲となった。軍の将校だった。事件は国内で長く伏せられ、死亡の通知も来ない。母は戦後も夫を待ち続けたという。▼軍人のほか医師や弁護士、記者ら民間人も標的となった。ソ連側が知識人層を一掃し、抵抗の芽を摘もうとしたらしい。当初「ドイツ製の銃が使われた」とナチスに責任を押しつけたソ連だが、冷戦が終結した後の1990年、ようやく凶行を認めた。▼そのカチンからドニプロ川沿いに南へ数百キロ、ウクライナのキーウ州から届いた映像に息をのんだ。ロシア軍が撤退した街に残った遺体のいくつかは普段着姿で、後ろ手にしばられている。バンの中積み上がる遺体は冒頭の映画さながらだ。▼「高精度の武器で軍事施設を破壊する。民間人は危険な目に遭わせない」。2月の侵攻開始直後、そんな声明を出したロシア国防省は今回、この惨状にも「欧米メディア向けにウクライナ側が創作した」と反論した。▼プーチン氏がカチンの慰霊施設を訪れたのは2010年の春。碑の前でひざまずき、「残虐行為は決して正当化できない」と述べた。ワイダ監督もポーランド代表団の一員として参列したあの式典で、プーチン氏は何も学ばなかったのか。



映画「カチンの森」のワンシーン

私が映画「カチンの森」を観たのはかなり前のことで、たしか博多駅のバスセンタービルにあった「シネリーブル博多（今は閉館しています）」という単館ロードショーの映画館だったと記憶しています。「天声人語」を読んで、映画の内容を思い出そうとしましたがなかなか浮かんできません。しばらくして「豊庄だより」に書いたことを思い出し、バックナンバーを探しました。12年前の113号（2010年1月25日）でした。※詳しい内容は113号を裏面に載せていますのでご覧ください。

連日報道されるウクライナ情勢に接し、「カチンの森」の経験が全く教訓化されていないのに絶望感を感じます。第2次世界大戦において多くの犠牲者を出し、武力によって領土を奪う行為は国際的に認められないことになっていたはずですが。まさか、「カチンの森」と同じようなことが21世紀の現在に起こるとは・・・。

前号で（入園式でお話した）私が大切にしてきたこと、これからも大切にしていきたいことを書きましたが、平和と人権の問題はもっとも大事にしなければならない課題だと思っています。戦争は最大の人権侵害です。今回のように民間の施設を破壊し、民間人を殺戮する行為は許されるものではありません。※映画の再上映は見込めそうにありませんし、レンタルでも扱ってないでしょう。興味をお持ちの方は、集英社文庫から『カチンの森』というタイトルで出版されていますのでどうぞ。